理研会報

発行
印旛研理科研究部
事務局
成田市幸町948の1
成田小学校内

県教研 大会報告

中学校理科部会の概略

佐倉中 片岡 勤

一、私たちの発表内容について

(1)内容

力学教育を楽しく解りやすいものにする為、生徒による教具に依らない力学用教具の開発とパチンコを応用した昇力の指導法により、力学学習の定着率を高めた。

(2)反応

①教具そのものに対する評価は高く、教師や生徒が容易にしかも安価にできることに関心があつまつた。

②対称実験群の事後処置について不備が指摘された。

二、他支部の発表について

(1)全体的印象

発表の内容は、具体的かつ授業にすぐ結びつけられるような内容であり、教師個人の努力と発想によるものが多かつたように思われる。ただ、曽的には支部教研の域を出ないもの、実践記録のないもの、身近一点だけの研究であるものが多く、他支部の中には[illegible]回リでやっているような様子が見受けられるものもあつた。また、発表に対する質疑が一部の人に片寄り、残念であつた。

(2)具体的内容(一部)

①東葛支部

キリモミ式火おこし法を利用して行つた研究発表。火おこし自体は珍しいものではないが、生徒一人一人にやらせる教具の工夫が特に目立つた。

②千葉支部

生徒に授業で習つた事を総本とさせたり、理科室の使い方、生徒の活動の場としての理科室のあり方についての発表。一斉学習と個別(同じ問題を持つた生徒同志がグループとなる)学習の使い方と、特徴があつた。

三、反省

私は教研それ自体の現在つきあたつている問題点を見直すような感があつた。やはり県教研の中では支部教研の中で競い合つたものを出すべきであり、又、個人研究よりもグループ研究中心に数年間の継続性をもつた発表が多くなつてほしいと感じた。

私達も、もう一度教研そのものを見直し、みんなで考え、みんなで話しあえる、そして、互いに研修できる場として生かせるようにしていきたい思う。これからもできるだけ多くの人々が研究員集会に参加する事の大切さを感じた。

昭和五十九年度 各部会の事業記録

一部会

・4・20 部会研究部総会
・5・25 部会研究員集会(佐倉中)
・6・27 部会研究員集会(佐倉小)
・8・3~5 部会鉱物採集会(福島県)
・9・21 部会理科作品展(間野台小)
作品総数六百九十六点
・10・3 部会研究員集会(佐倉小)
・9・28 部会研究員集会(佐倉小)
・10・2
昨年度、はじめて鉱物採集会を実行しました。準備不十分でしたが、良い鉱物を採集でき、好評のうちに帰校しました。

二部会

・5・4 二部会研究部総会
・6・12 部会中学校実技研修会(吾妻中)
・7・6 部会役員会・研究員集会(豊住中)
・8・6~7 部会理科指導者研修会(三里塚小)
・8・8 部会採集会(印西町)
・9・20~22 部会理科作品展(安食小)
作品総数 四百三十点

三部会

・5・4 部会研究部総会(宮森小)
・6・1 部会小学校実技研(吾妻小)
空気性質等 52名参加
・6・12 部会中学校実技研(吾妻中)
正しい実験のあり方等
・8・8 部会屋外研修会(印西中)
地層巡検と貝化石の採集
参加者 三十三名
・9・14 部会理科作品展(印西中)
作品総数 二百八点
・9・28 部会研究員集会(小学校)
・10・2

四部会

・5・1 部会研究部総会(中央中)
・6・20 部会研究部員会(八街中)
・7・3 部会理科主任会(八街中)
・7・31 部会研究部員会(八街中)
・8・10 部会研究部員会(東庄小)
・8・27 実技研(メダカの観察・ガラス細工等)(八街中)
参加数小16名 中6名
・9・19 部会理科作品展(笹引小)
作品総数 百五十点
・9・28 部会研究部員会(八街中)

五部会

・5・4 部会研究部総会
・5・22 理科主任会(四中)
・6・5他 部会研究員集会(四中他)
・8・8 野外研修会(フィルムケースを利用した実験器具の製作)
参加数小12人 中8人
・9・18 部会理科作品展(四小)
作品総数三百五点
・12・4 部会理科研究部会議(四中)

昭和五十九年度は、部長に、成田市立公津小学校長、武藤喜正先生より酒々井町立酒々井小学校長川勝丸重先生にバトンタッチされ副部長に、印西中学校教頭、牧野隆先生、安食小学校前教頭、五味健先生、幹事として、成田小学校小山治先生、玉造小学校、木川春先生で出発した。

理科研究部は、印教研の中でも国語科、算数科に次ぐ、第三番目の部員数(小学校三百三十名、中学校百三十名)計三百五十名)を有する研究部であり、年々増加の傾向にあることは、理科教育の振興のため非常に喜ばしいことである。

私も、昭和三十一年から、研究部の末席をけがしている一人であるが、感無量の感がする次第である。

本年度の研究部の活動内容は、

(一)教研活動の推進
(二)理科作品展
(三)実技研修会
(四)研究学校への協力
(五)理科教育報の発行

の五つの柱が立てられ活動してきた。

教研活動についてみると、部員の増加により、低・高・中学校の三部科会で研究集会を持つようになつた。

しかし、高学年部科会、中学校部科会に集中し、低学年部科会は各部会とも研究推進に苦労されたようである。

また、研究活動も、三年を周期とした研究が定着したようであるが、指導主事の五味健先生より、指摘された通り、三年で研究が一段落すると、そこで切れてしまい、継続されないとか、過去の研究が埋れてしまい活用されない等、月後、研究を進めるうえで一考を要する問題もある。

理科作品展については、年々活発化し、喜ばしいことではあるが、教師の指導の手が加えられず、児童・生徒の作品をそのまま出されてくるのは、残念である。

理研会報発行については、本年度、第百五十号達成という記念すべき年でもあり、皆々と継続発行されてきた。原稿集め、筆稿等に努力されてきた事務局に対し、感謝する次第である。

筆稿についても、これだけの印刷を書くには、そうとうの日数がかかるであろうし、家庭に帰つてからの仕事で、大変なことと思う。

研究学校への協力では、五十九年度は、八街市立二州小学校が二年目の研究の成果を十一月九日(土)に公開発表し、指導主事 五味健先生を指導者に迎へ県員約百十名の参加を得た。おわりに、昨年八月 副部長であつた五味先生が印旛地方出張所指導主事に御栄進されたことを付記する。

本年度を振り返って

副部長 台井 望

理研会報 発行 印刷